

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

＊: 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC: 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

Ⓒ: パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし: 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利的かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 UTokyo OCW 学術俯瞰講義
Copyright 2014, 佐藤健二

The University of Tokyo / UTokyo OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series
Copyright 2014, Kenji Sato



戸田貞三と日本の社会学

家族研究と社会調査

東京大学大学院人文社会系研究科教授
佐藤健二（社会学）

19世紀における社会学の誕生



from Wikipedia

Isidore Auguste Marie
François Xavier
Comte (1798-1857)

フランス革命後の社会の混乱に対して

『社会再組織の科学的基礎』 [1822]

『実証哲学講義』 [1830-42]

三段階の法則

神学的精神→形而上学的→実証的精神

軍事社会→法律社会→産業社会

総合社会学と特殊社会学



from Wikipedia

Herbert
Spencer
1820-1903



from Wikipedia

Georg
Simmel
1858-1918



from Wikipedia

Emile
Durkheim
1858-1917



from Wikipedia

Max
Weber
1864-1920

総合社会学

社会進化論
学の大系化

特殊社会学

経験的な分析対象の設定
学の方法化

新語としての「社会学」

Sociologie: コント『実証哲学講義』[1839]の造語



from Wikipedia

初メニ世態學ヲ授ケ次ニ政治學

*

第三年ノ理財學ニ於テハミル氏著理財學ヲ以テ教科書トシ先ツ該學ノ原則ヲ考究セシメ次テケアル氏著理財論法ヲ學ハシメ且講義モ之ヲ授ク又政治學ニ於テハ初メニ世態學ヲ授ケ次ニ政治學ノ原理ヲ講義ス但政治學ノ原理ニ關シテハ學生ヲシテ數書ヲ自讀セシメタリ

二百五十八

『東京大学年報』
Fenollosaの授業報告

『哲学字彙』
Sociologyの訳語



Sin	罪過、
Sincerity	信實、欸誠、敦厚、
Singular	單稱、
Size	大小、
Socialism	社會論、
Society	社會、
Sociology	世態學、

東京大学史料研究会『史料叢書 東京大学史 東京大学年報第二卷』東京大学出版会、1993年、p.83。

新語としての「社会」

- | | |
|-----------|------------------------|
| (1) 「会」 | 公会、会社、仲間会社、衆民会合 |
| (2) 「社」 | 結社、社友、社交、社人、社中 |
| (3) 「交」 | 交社、交際、世交 |
| (4) 「間」 | 世間、俗間、人間仲間、仲間会社 |
| (5) 「人」 | 人間、人間道徳、人間仲間、人間世俗、人倫交際 |
| (6) 「群・相」 | 為群、成群相養、相生養（之道）、相済養 |
| (7) 「世・俗」 | 世俗、俗化、俗間、世間、世道、世態 |
| (8) 「民」 | 人民、国民 |
| (9) その他 | 懇、邦国、政府など |

東京大学における社会学の歴史



from Wikipedia

外山正一

1848-1900

1866年幕命で英国留学。1870年森有礼とワシントンに外務省から赴任。1872年官を辞し、勉学

1873年ミシガン大学選科入学

1876年帰国、東京開成学校教授

1877年東京大学設立とともに文学部教授

英語、心理学、論理学等を教える

1886年フェノロサ帰国後は社会学を担当

1893年帝国大学に社会学講座が設けられる

講座担当教授としてスペンサーを講じる

1897年東京大学総長

1898年文部大臣

東京大学における社会学の歴史



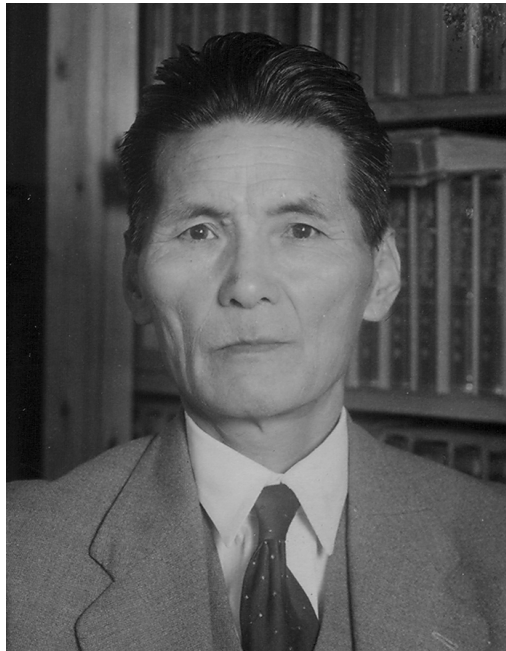
- 1889年第一高等中学（一高の前身）入学
- 1896年帝国大学文科大学哲学科卒業
- 1897年社会学講座を高木正義と講師として担当
- 1898年社会学研究のためドイツ留学
- 1900年留学中に帝国大学文科大学助教授
- 1901年帰国とともに教授 社会学講座担当
 - コント社会学説を「実理主義」と講ずる
- 1903年文科大学に「社会学研究室」を設置
- 1913年日本社会学院を学会として設立
- 1922年東京帝国大学教授を辞任
- 1923年故郷新潟から衆議院議員に当選



建部遯吾 1871-1945

『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』1954年に掲載。

東京大学における社会学の歴史



*

戸田貞三

1887-1955

1912年東京帝国大学文科大学

哲学科（社会学専修）卒業

1913年富山県立薬学専門学校で教員

1917年東京帝国大学文科大学助手

1919年大原社会問題研究所所員

1920年東京帝国大学文学部講師

アメリカおよび欧州へ留学

1922年帰国

東京帝国大学助教授、第一講座担当

1924年日本社会学会設立

1929年東京帝国大学教授

1944年東京帝国大学文学部長

1947年退職

写真) 『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』 1954年に掲載。

東京大学における社会学の歴史

「フェノロサ&外山」時代（明治11-19）

「外山」時代（明治19-30）

→スポンサーの社会進化論

「建部」時代（明治30-大正11）

→コントの総合社会学

「戸田」時代（大正11- ）

→特殊社会学の発展

実証研究の登場

家族の研究：『家族構成』以前

家族制度史：あるいは「制度」としての家族

◎「日本に於ける家の制度の発達」1913

「現在我国の家なる制度が如何なる状態にあり、而して是が将来如何なる形に変わり行くや、旧来の家族制は全く崩潰し去るものなりや否やは、実に我国民の経済上政治上及社会生活上の根本的大問題にして従来屢々有力なる学者諸先輩により論ぜられ、而も尚其解決を見ずして存する頗る困難なる研究題目なり」

背景としての民法改正：「戸主制度」の存廃

『戸田貞三著作集＜第1巻＞』川合隆男監修、大空社、1993年、pp3-4より引用。

制度の議論と実態の解明

「先生は、事実の分析に立脚していない議論をすべて「お説教」と呼び、私は「俺はお説教は嫌いだ」という言葉を何遍も聞かされた」（清水幾太郎）〔：別巻 p.231〕

「戸田先生は「オピニオンはだめだ。具体的な事実をつかまなきゃ、だめだ」というんで、卒論でも単なるオピニオンを並べたものは容赦なくふるい落とされました。」（小山隆）〔：別巻 p.202〕

「先生はなんでもいいから事実を扱うほうがいいと言われるのです。」（牧野巽）〔：別巻 p.192〕

『戸田貞三著作集＜別巻＞』川合隆男監修、大空社、1993年の各ページより引用。

1910年代における調査の機運



◎日露戦争後の格差問題

内務省地方局の「細民調査」

◎第一次大戦後の社会問題

高野岩三郎らの労働者生活調査

◎大原社会問題研究所

倉敷労働科学研究所

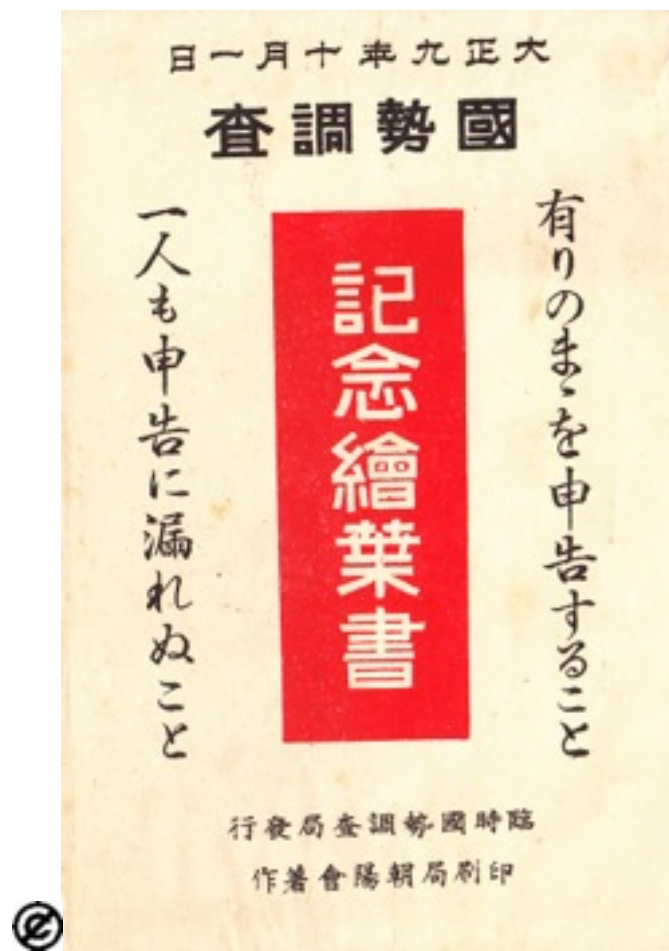
◎東京市社会局など

地方自治体の社会調査

第一回国勢調査（1920）

- ・ 基幹統計（指定統計）調査→申告の義務
- ・ 特定の一時点での直接調査→10月1日午前0時
- ・ わが国居住者に対する唯一の全数調査
→「一人も漏らさず、重複せず」
- ・ 5年ごとのパネル調査→本調査／簡易調査、項目の変化
- ・ 「国勢」→戸口調査、人口調査、センサス

文明国家の一大文化事業



(記念絵葉書の袋)



(記念絵葉書)



申告としての調査

國勢調査
 このしらべ
 國勢調査は、國民の生活、社會の
 實況をよく知り、善政の基礎を作
 らんが爲に行ふものなり、され
 ば、申告義務者は、誠實に申告
 を爲し、奮てこの文明的國家事業
 に協力せらるべし。

右の通相違無之候也

世帯主又は世帯の管理者
 申告書二枚以上に互る
 ときは、最終の順に
 添き入れること。

名氏

印捺

國勢調査員検印

(國勢調査員検査の
上捺印すること。)

申告書の
署名捺印

識字の問題

第3回昭和5年調査票

一 裏面の記入の範囲(いろは)に
當る者の氏名を漏なく記入し、
其の他の者はたとひ家族であ
つても記入しないこと。

二 普通の世帯では世帯主、妻、
父、母、長男、長男の妻、女中、來
客等の順に記入すること。

三 寄宿舍、病院、旅店、下宿屋、
船舶等の準世帯では、先づ寄宿
人、患者、宿泊人、船客等、次に
事務員、雇人、船長、船員等の順
に記入すること。

かきこまれるひとびと
記入の範囲

(い) 世帯主又は世帯の
管理者は、十月一日
午前零時(九月三十
日)より十月一日に移
る(夜半)に其の世帯
に在りたる各人(家
族なるか否かを問
はず)の各事項を
本紙の各欄に、
漏なく書き入れるこ
と。

第1回大正9年調査票

戸田の欧米留学

1920（大正9）年2月～1922（大正11）年9月

「私の留学命令は、アメリカ、イギリス、フランスに留学を命ずというのでした。後にドイツにもゆきましたが、アメリカに一番長く前後一年半留まりました。」

「アメリカ社会学から理論的に学んだところよりも、実際の社会現象をつかまえて深く探求してゆくという学風に大いに学ぶところがありました。」

「シカゴに一年いてから、ワシントンに二ヵ月、ニューヨークに四ヵ月、その他の都会も二、三日ずつ見て廻りました。」

戸田貞三「学究生活の思い出」『思想』353号、p.90 [1953]

『社会調査』 1933年

日本最初の一冊にまとめた社会調査方法論

- ①全体調査・統計的調査法 → 国勢調査
- ②部分調査・選択的調査法 → 標本調査
- ③個別調査・事例的調査法 → 事例調査

戦後の「質的／量的」の二分法とは異なる理解

この後における戸田の社会調査に関する多様な関与・活動

- ・ 「社会調査」啓蒙活動
- ・ 調査プロジェクトの実践

現代社会学の問題意識から

戸田貞三の実証主義の苦悩：確立期の模索

- ・ 家族社会学の確立のなかで

「制度」としての家族

→ 「集団」としての家族

→ 「場」としての家族

- ・ 社会調査論の確立のなかで

「質問紙調査票」「フィールドワーク」の確立

「対象」への接近のプロセス

→ 対象に関する認識生産のプロセス

道具となる知識の再検討